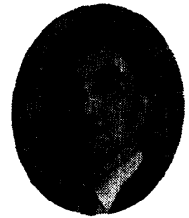


巻頭言



会員の層を広げるために

井上 晴雄†



情報処理学会がわが国の情報科学・技術界を代表する学術団体であるためには、常に高い学問水準を維持しなければならないと同時に、発展段階にある関連分野の広い層の支持を受けなければならないであろう。ここでは学会員の層の広がりについて二・三の私見を述べさせていただきます。

まず、本学会員のプロフィールの一つの特徴として、コンピュータ・ユーザの占める割合の大きさがある。全会員の40%が利用分野に属しているともいわれるが、これらの会員は学界の先端的研究・開発の恩恵をその成果物のハードウェアないしソフトウェアとして直接受ける地位にある。しかしなおユーザは毎日の情報処理業務の中で多くの問題を抱え、解決に苦心しているのが実情であろう。ユーザの問題に含まれている本質が時として研究者の研究心を刺激し、新しい技術の開発につながるのではないだろうか。古くはCOBOLから最近のソフトウェア工学に至るまで、ユーザを共同研究者とした問題解決の例は多い。このような可能性をもっているにもかかわらず昨今本学会でのユーザの発言が多くないのが気になるところである。全国大会の発表者リストから推察して、利用部門からの発表件数は数パーセントである。56年から全国大会は年に2回開催されるようになり、発表の機会は増えている。先導的研究に対してはシンポジウム形式の導入などより充実した討論の場が用意されることになろう。利用部門の各位におかれては躊躇することなく登壇し、問題を提起していただきたいと思う。

現会員の活発な活動とともに、新規会員の着実な増加も期待したい。過去5年間の会員数の伸び率は年平均11%であった。この成長を続けるためには会員にとってメリットは何かが問われなければならないだろう。若い新会員、特に利用部門の新会員は情報科学、情報処理技術の最新の知識を求めている。このような要請に応えるべく会誌の編集について払われてきた努力には深く感謝したい。今後とも若い会員だけでなく

専門領域を異にする読者への配慮もよろしくお願ひしたいと思う。

つぎに、地方在住の方の学会活動への参加に触れたい。現在、会員の70%以上が首都圏で活躍されていると見られる。この分布については色いろな解釈ができようが、地方の会員の層をより厚くすることが可能かつ必要と思われるのである。周知のように、本年1月には九州支部が5月には東海支部が相次いで設立された。本学会にとっては関西(38年)、東北(47年)に次ぐ4番目の支部である。設立に尽力された関係各位に敬意を表しつつお喜び申し上げたい。また、支部発足を期して本年後期の全国大会は九州で開催される。全国大会の東京以外での開催はこれまで創立15周年記念として京都で49年に開かれただけである。地方の会員が活躍しやすい環境づくりは今後とも学会の重要な施策であるべきだと思う。

最後に、会員諸兄からご意見を承りたい点の一つある。それは他学会との交流についてである。国際レベルでの問題を含めて本学会の将来についての展望が論じられなければならないだろうが、ここでは国内の身近な問題に限らせていただく。各種研究会を他学会と共催することはこれまでもしばしば行ってきたし、本学会の学際性格からすれば当然望まれることであろう。いま一例として電子通信学会との関係をみると、20%強のわが会員が同学会にも加入している。この事実は両学会の対象分野の親近性を表わすと考えられるが、このような学会と合同でシンポジウム形式を取り入れた全国大会をもつというのはいかがであろうか。具体化するには多くの実務的問題を解決しなければならないが、会員諸兄におかれてもご提案いただければ幸いである。

以上学会員の層の拡大について個人的見解を述べさせていただきます。視野狭隘な点はお許しいただきたい。

(昭和57年5月10日)

† 本会理事 鉄道技術研究所